

花ちゃん、オー君、モンタ博士、フツ博士のかくかくドド摺立ててく5

国立市立国立第七小学校

平成29年9月15日 NO.47 (447)



オー君 「うわあ！何だこりゃ？」

花ちゃん 「これは、ガマの穂をたてに切ったのですね。」

モンタ博士 「そうだよ。学校にある大きなカッターで、『エイっ！』とやったら、二つに切れたんだ。」

オー君 「大きさがよくわかるように、定規がおいてあるんですね。」

花ちゃん 「切る前の様子がわかるように、もとの形のガマもありますね。」

オー君 「もしかもしゃした綿のようなものもありますね。」

モンタ博士 「よく気がついたね。その前に、ガマの花のつくりについてお話しするね。」

まず、ガマの穂は雌花で、無数のとても小さい花がぎっしりとつまった形をしているんだ。」

花ちゃん 「雌花というのは、メスの花ですね。オスの花はどこにあるの。」

モンタ博士「いい質問だね。穂の上につきでた串のような部分が雄花なんだよ。オスは花粉を飛ばしやすいように上についているんだ。メスはそれを受け止めやすいように下にあるということさ。」

オー君 「ふーん。なるほど、うまくできているんですね。」

モンタ博士「ところで、ここでクイズにするよ。たくさんあるように見えるガマの種は、一本の穂の中にどのくらいあるのでしょうか。」

花ちゃん 「そうですね。1000個くらいですか。」

オー君 「いや、もっと多いと思うな。そうだ！10000個くらいかな。」

モンタ博士「ブー！二人とも残念でした。ガマの穂には、およそ350000個もの種が入っているとされているんだ。」

花ちゃん 「すごい数ですね。おどろきですね。」

モンタ博士「あんなに小さな花の中に350000個の花が咲き、350000個の種を宿すわけだね。小さな穂の中に、350000もの命の営みがあるということなんですね。」

オー君 「350000個といっても、何だか想像がつかないな。」

モンタ博士「そうだね。そういう時は、人口の数で考えてみようじゃないか。さて、国立市の人口はどのくらい知っているかな。」

花ちゃん 「たしか、70000人くらいだったかな。もう少し多いかな。」

モンタ博士「そうだね。詳しい数字はわからないけど、たしか75000人を超しているね。つまり、国立市の人達の5倍くらいの数の命があるということさ。」

オー君 「でも不思議だな。どうしてそんなにたくさんの種を作る必要があるんだろう。」

モンタ博士「これまたいい質問だね。こんなにたくさんの種を作るということは、それだけ、エネルギーを使うということだね。だから、ガマの花は、花びらもがくもつけずに、ただオシベとメシベだけのとてもシンプルな構造になってしまったんだろうね。」

花ちゃん 「ガマはすきまなく種をつくり、皆でよりそい力を合わせているんだ。」

モンタ博士「そうだ。地球には70億の人がくらしている。皆で仲良くしなくちゃね。」